

『イギリス労働貴族』

——十九世紀におけるその階層形成——

佐久間 亮

本書は、十九世紀のイギリス史を読み解く鍵となる労働貴族の階層形成の在り方を、イギリス本国における膨大な研究蓄積を利用しつつ明らかにしたものである。本書の中でもふれられているように、この階層の形成そのものを疑問視する見解から、この概念の意義、とくに、十九世紀中葉以降の改良主義の出現を説明する上で有効性に否定的なものまで、この概念には様々の批判がある。本書ではそうした見解も考慮に入れつつ、その上で、労働貴族が階層として形成しえた主張する。ではそれはいかにしてであろうか。以下本書の内容を概観してみよう。

第一章 十九世紀イギリスに固有な現象としての労働貴族

——十九世紀イギリス労働貴族研究をふりかえって——

ここでは、まずエンゲルス、レーニンの労働貴族把握に見られる差異を指摘しつつ、レーニン流の労働貴族把握を克服する形で、ホブズボーム以降の労働貴族研究の潮流が現れた事情が説明される。レーニンによる労働貴族理解の特徴は、「ブルジョアジーの社会的支柱」としてのその役割を強調し、帝国主義段階において、

これがイギリスのみにみられる現象ではなかったとする点にある。これに対してホブズボームは、労働貴族を十九世紀後半のイギリスに固有の存在ととらえなおし、レーニン流の解釈からの脱却を試みる。彼は収入の高さとその規則性によって労働貴族が規定されるとして、その要因として自らの労働の「人為的希少化」を労働組合を通じて達成しえたことを重視し、熟練労働者の一部分、すなわち労働組合に組織された労働者からこの階層が構成されたと主張する。また、この階層のもつイデオロギーとブルジョア・イデオロギーの差異を指摘し、レーニン流の「社会的支柱」という見方を退ける。

こうした把握は若干の修正を加えられつつも、ホブズボームの後期研究に引き継がれる。ここでは、個々の職種の熟練労働者を単一の労働貴族層に統合する役割を果たすものとして、労働組合の役割がさらに強調され、また意識分析においても、七十年代以降の労働貴族のリスベクタビリティ研究に基づいて、初期の研究での主張が再確認されている。

つづいて、ホブズボーム以降の本格的な実証研究が紹介され、レーニン流の解釈に依るフォスターを除いて、これらが大筋ではホブズボームの理解の枠内にあると指摘される。そのなかでも、社会的・文化的側面に視点を据え、ヴィクトリア的社會通念であったリスベクタビリティによる労働貴族の階層形式をとらえ、「集団的な意味」を付与されたこの階層のリスベクタビリティの独自性を主張したグレイ、クロシツクの研究が高く評価される。他方、フォスターは労働貴族の経済分析を賃金水準から生産の場へと移すことによって、論議を惹起したとして、生産の場にお

る労働貴族の存立条件の把握にみられる様々な見解の相違が紹介される。

最後に労働貴族論に対する批判学説が検討される。ことに後論との関係上重要なのはジョオンズ、ジョイス、カークの説であろう。この三者は何れもフォスター説批判を主目的としつつ、労働貴族の階層としての形成、更には改良主義の説明概念としての労働貴族に疑義を呈する。ことに、ジョイス、カークは生産の場における綿業労働者の同質性を主張し、さらにカークはリスベクタビリティが労働貴族の階層形成の契機とはなりえないとして、グレイ、クロシツクの見解をも暗に批判する。

著者は、これらの批判にもかかわらず労働貴族の階層としての形成、さらには改良主義の説明におけるこの概念の一定の重要性を主張する。しかし、そのためには、二章での生産の場を中心とする労働貴族形成についての検討、さらに三章のリスベクタビリティを基軸とする、社会・文化面での階層形成についてのより詳細な検証を待たねばならない。

第二章 アーティザンと労働貴族

生産の場における労働貴族形成に関する論争の焦点となつてゐるのは、機械工業と線工業である。ここでは両産業におけるアーティザンの在り方が詳細に検討される。

まず、機械工業の発展において決定的であつたといわれる一八五二年のロック・アウトとそれに至る「合同機械工組合」のストライキの検討から、その主要な争点が組織的残業と請負作業の問題とともに、「不法」労働者の導入にあつたことが確認

される。これらが争点となる背景には、水車大工の万能「真性」の熟練が十九世紀前半に解体し、水車大工ほどの独立性と交渉力をもたない新たな熟練機械工が出現したことがある。ところが、ロック・アウトが労働者側の敗北に終わったにも拘らず、上記三点の導入が以降後退することになる。その理由の一つはイギリス機械工業の世界市場独占と、その多様なニーズに対応する多品種少量生産を特徴とする企業経営と技術革新の停滞のもとで、多様な熟練と知識の必要性がもたらされたことにある。こうした多面的「真性」熟練を有する新たな熟練機械工は、徒弟制度に基づき入職制限を行い、生産の場における一定の自律性とクラフト的伝統を維持しえたと考えられる。

彼らが、この自律性を基礎に組織的抵抗運動を展開したことが、もう一つの理由である。高額な入会金と組合費ゆえに上記の熟練機械工中心の組合であつたのは、共済制度を主要な手段としつつ、上記三点の導入を阻止すべく組織的職業政策を遂行した。その際、非組合員熟練工との協力が不可欠であつたが、熟練機械工中で賃金面で恵まれた地位についていたのは、共済制度によつて労働力の窮乏販売を免れた組合員であつた。

他方、一八四〇年代までに工業革命の展開を経験した綿工業において、他に比して高賃金を維持していたのは精紡工である。しかし、とくに自動ミューール精紡工の場合、彼らが「真性」熟練を有しない半熟練労働者であつたという点で熟練機械工と相違する。彼らの高賃金が維持された理由は、内部請負制度のもとで、糸継工らの他の労働者を監督し、時には彼らを直接雇用する立場を通じて自律性を有していたことに求められる。そして、この制度

が保持された理由の一つとして、十九世紀を通じての綿業の繁栄と、労働の再編成を困難にする厳しい競争条件の持続が考えられる。

しかし、この制度を持続せしめたもう一つの要因として、ここでも精紡工の組織的運動を考慮にいれる必要がある。とくに、四十年代以降組織的力量を蓄えていく自動ミュール精紡工による運動が重要である。これを通じて、内部請負制度のもとでの昇進制度による入職規制、ひいては精紡工の特権が維持される。この特権は、各地域の賃金リストによって支えられ、またそれに反映されることになる。

以上のように、ヴィクトリア中期のアーティザンは、技術変化に伴う分業の影響を被らずにクラフツマンの伝統を維持し得たグループのみならず、機械工に典型的にみられるように、旧来の手工的熟練は分解したが、「真性」熟練を様々な要因によって維持したグループ、さらに例外的ではあるが、自動ミュール精紡工のように半熟練しか持たなくなったにも拘らず「社会的につくられた熟練」に基づいて、その地位を維持したグループに分類される。続いて著者は他の職種の熟練養成の在り方を検討した後、これらアーティザンと労働組合の関連について論を進める。こうしたアーティザンのうち労働組合に加入していたものはその一部にすぎない。その理由として、職業政策遂行上の組合の必要性に関する認識の相違が挙げられる。そして労働組合員であるアーティザンは非加入のアーティザンを「下劣にも利己的」な労働者とみなし、両グループ間に明確な一線が引かれたとされる。したがって、アーティザンの中でも、労働組合に組織されたものが一つの具体的

階層を形成していたのは明らかであり、著者はここでの結論として、このグループが労働貴族層を形成していたと主張する。

第三章 社会成層とリスベクタビリティ

ここでは労働貴族の社会・文化的形成と、その要因としてのリスベクタビリティの意味が、批判的学説も含めてより包括的に検討される。

著者は、まず労働者間におけるリスベクタビリティ育成・伝達手段として従来重視されてきた諸制度（ここでは教会、日曜学校、職工学校、労働者大学、労働者クラブ、禁酒協会、さらに友愛協会、協同組合を指す）において、アーティザンがいかなる比重を占めていたかを検討する。その結果、これらはいずれもアーティザンの独占物ではないが、その特定の部分が一つにまとまる傾向を示唆するものであるとの指摘がなされる。

このことは、二世代間の職業継承と婚姻を通じてのアーティザン同士の結合度を結婚登記簿に基づいて検討したクロンツク、グレイ、松村高夫氏らの研究によって、より明瞭に示される。「望ましい社会的地位」を求めて、居住地域・家屋の区別をすることによって、自らを下層労働者から引き離そうとするアーティザン・エリート意識がこうした階層形成をさらに助長する。

つぎに、労働者にとつてのリスベクタビリティが如何なるものであったかが、これを明瞭に体现する協同組合と加盟友愛協会の検討を通じて示される。それは、救貧法の適用や慈善を受けることなく、パトロニッジを拒否し、自己に依存することを旨とする自主独立の理念を根幹に、この自主独立を保障し、かつそれによ

って育成される諸徳性（堅実さ、思慮深さ、正直、節制、勤勉、慎重、辛抱強さ等、さらにこれらを服装等の体裁によって示すこと）を内容とする。そして、協同組合、加盟友愛協会を通じて重要性が体得される貯蓄や儉約が、その経済的基盤となる。しかし、リスベクタビリティの育成・保持に関して、重要な役割を果たしたとみられる組織はこれらのみではない。労働組合もまた、一面では儉約に基づく自助の制度という友愛組合的機能を有しており、労働者が団結によって自らのリスベクタビリティを保持・育成する制度だったと考えられる。そして、労働者にとって、リスベクタビリティおよびその社会的承認は、組織された集団として得られるものであった。

次に、リスベクタビリティの社会的意味が、これに関する諸説をふまえて論じられる。リスベクタビリティが中産階級の社会規範に基づくものであり、労働者階級の富裕な層に受け入れられたとする理解が、ウェップ夫妻、コール以来の通説であった。これに疑義を呈したソルフスは、リスベクタビリティ、あるいは「尊敬されうる労働者像」は中産階級によって労働者に適合しうる特殊なものとして提示されたもの（更にC・リードは、これを労働者統合の為のイデオロギーとみる）であり、労働者文化は、こうした理念に全面的に浸潤されたのではなく、それと厳しく対立する特徴をも保持していたと主張する。このソルフスらの主張を一面で発展させたのがクロシツク、グレイなのである。彼らによれば、労働者の示すリスベクタビリティは、「労働者階級の生存の諸現実」によって集団主義的に再解釈された独自のものであり、それは、労働組合、協同組合、友愛協会等の組織的な活動

を展開することによってのみ保障されるものと解釈される。そして、このリスベクタビリティをより強く示すことができ、したがって、他のアーティザンに対して優越的意識を強くもちえたのが労働組合に加入していたアーティザンなのであると著者は見る。そして、かれらが、先にみたように、結婚等を通じて、エリートとしての独自の階層を形成していたと考えられる。

第四章 トマス・ライトにみる尊敬されうるアーティザン

自ら熟練機械工として、労働者階級に関する「唯一無比」とも言うべき記録を残したトマス・ライトの三冊の著作、『労働者階級の性向と慣習』一八六七年、『偉大なる下層民』一八六八年、『われらの新しい主人たち』一八七三年は、十九世紀イギリス労働史研究、とくに労働貴族研究の上で数多く引用、言及されてきたものである。しかし、近年この三冊の包括的な分析をおこなったA・リードは、これらの内容は『労働貴族』概念に明白な支持を与えるものではない」と主張する。この章では、トマス・ライトの三著作の分析から、そこに、ここまでみてきた労働貴族の存在を確認することが可能かどうかを検討される。

ライトが労働者の階層区分を意識的におこなっているのは、主に『下層民』の「労働者たち」、『主人たち』の「労働者階級の構成」の二つの章においてである。リードは、主にこれらの章の内容を検討し、ライトの著作は労働貴族の存在を明らかにしようものではないと主張した。しかし、ここにみられる労働者の階層区分には大きな相違、さらには相互矛盾が見られる。著者はそれを詳細に検討した後、その原因として、ライトの理想とする労働者

像の投影を指摘する。すなわち、この理想像に照らしての労働者階級の社会的向上（特に、教育の普及を通じての）に対する希望の予測の程度が、それぞれの執筆時点で相違することによって、こうした相互に矛盾する階層区分がなされたのである。その意味で、ライトの意識的な労働者階級の区分はかなり主観的なもので、という。そして結局のところ、彼は『下層民』では、労働者階級を大きくアーティザンと不熟練労働者に分けており、また『主人たち』でも、とくにアーティザンと不熟練労働者の区分を詳細に説明しているのである。

この区分がライトの観察において重要であったことは、著作の他の部分を含めて検討すればより明らかとなる。彼はアーティザンの補充が徒弟制度を通じて、主にアーティザンの子弟からなされること、アーティザンと不熟練労働者との間に賃金格差、さらには支配・従属関係が存在していたと主張する。また熟練職業（機械工業）における「書かれざる慣習」の詳細な説明は、労働の場におけるアーティザンの相対的自律性、熟練職業への独特の觀念、あるいは作業場における彼らの非公式的団結の存在を示すものである。これらから、アーティザンが、不熟練労働者と混じり合うことの少ない独自の階層を形成していたことは明らかである。しかし、ライトの考察からそれ以上の階層形成を看取することも可能であると著者は主張する。ライトは、労働者階級の劣悪で不安定な状態の要因として失業と疾病を指摘し、そうした状態から脱却する手だてとして労働組合の相互保険機能を最も重視する。したがって、労働組合に組織された一部のアーティザンが経済的に比較的恵まれていたと考えられる。また、熟練職業につい

ての独特の觀念や不熟練労働者に対する排他的態度が最も強固にみられるのも、彼らにおいてであったとの指摘もなされる。以上のライトの観察から、労働組合員であるアーティザンが一つの階層を形成していたと考えられるのである。

このことは、労働者のリスペクタビリティに関するライトの観察からも確認しうる。ライトは、この通念がアーティザンのみならず、不熟練労働者のうちにも浸透していたとみているようである。しかし、リスペクタビリティの核心をなす自主独立の觀念をより強く示すのは、ライトいうところの「尊敬されうる貧困者」であり、これは貧困に陥ったアーティザンにほかならない。さらに、自主独立を保障する上で最も重要な制度は労働組合であり、組合員が、「労働者のなかで最も良く尊敬され、最も自尊心の高い人びとなのである」との主張もなされる。したがって、リスペクタビリティを最も典型的に体現していたのは労働組合員のアーティザンであり、そのことによって、彼らは他のアーティザンへの優越を感じつつ一つの階層を形成していたと考えられる。

著者は、以上のライトの著作の分析から、労働組合に組織されたアーティザンが、そのエリートとして労働貴族層を形成していたという、二章、三章での結論が確認されたと主張する。

むすび——自由労働主義と労働党の成立——

ここでは、労働貴族を主体に形成された労働組合運動の、十九世紀中葉以降「労働者代表委員会」成立に至るまでの展開の特徴を明らかにしつつ、この時期の労働運動が、その後の運動に対して根強い影響を与えたことが確認される。この時期の運動の特徴

は、自由労働主義という語に要約される。それは、自由党との一定の同盟を基礎に、圧力団体的院内活動を通じて有利な法律を獲得すること、および労働者の代表を議会に送りこむことを目的とするものであった。この制度化された労働貴族の運動は八十年代以降の社会主義の復活と新組合主義の台頭によっても克服されることなく、「労働者代表委員会」もまた政策的には自由労働主義の延長線上に立つことを余儀なくされるのである。

本書全体を通じての著者の基本的な結論は、労働組合に組織されたアーティザンが階層として他から区別される労働貴族を構成していたということにつきる。このことを、ホブズボーム以来の膨大な研究蓄積を着実に消化、検討しつつ明らかにしようとした点に本書の功績がある。著者流の視点で整理されたことにより、いささか錯綜している観のあるこの研究分野の基本的な方向性が明らかにになったと思われる。しかし、この結論が果たして本書のなかで十分に裏付けられたかについては若干の疑問を感じざるを得ない。著者は、これを三面から明らかにしようとしている。まず、第二章では生産の場での労働貴族形成の在り方を、機械工業と綿工業について詳細に検討した後、ヴィクトリア中期にアーティザンと呼ばれた存在がその熟練技能の基盤の相違による多様性を示していたこと、しかしその多様性にも拘らず、熟練に基づく自律性の保持ゆえに、職業に対する固有の権利を主張し得たという共通性を強調する。ここでの論証の力点は明らかに労働者階級内でのアーティザンの階層形成にある。しかし、著者はさらに議論をすすめて、このアーティザンの一部分、すなわち労働組合に組

織されたアーティザンから労働貴族が構成されていたと主張する。そして、労働組合に組織されていたアーティザンと未組織のアーティザンとの間には「明確な一線」が画されていたとされるのである。しかし、ここで引き合いに出されるのが、後の章で検討されるトマス・ライトと、一八三〇年代後半のランカンシャー州長官のアーチボルド・アリソンの言のみというのはいささか心細い。はたして、この「明確な一線」とは、ここまでの詳細な検討を通じて明らかにされた労働の場でのアーティザンの階層形成、あるいは組合員、非組合員を問わない「作業場における非公式の団結」を可能にするほどの同一性よりも明確なものだったといえるのだろうか。

この疑問は、リスペクタビリティを軸に、労働貴族の社会、文化面での階層形成を論じた三章でも感じられる。まず、前半でリスペクタビリティ育成の諸制度及び二世代間の職業継承と婚姻によるアーティザン同士の結合の度合を検討し、アーティザンの特定グループの集団形成を推定する。その後、労働者にとつてのリスペクタビリティの在り方、その社会的意味を論じつつ、労働組合が組合員のリスペクタビリティの保持・育成に寄与したと考えられること、また、ジョーンズ、ベイリーらの説をふまえて、労働者のリスペクタビリティが多様に示されることが指摘される。しかる後、労働組合員であるアーティザンこそが、様々な形で表現されるリスペクタビリティをより積極的に示しえたこととされる。そして、先に推定したアーティザンの特定グループと労働組合員であるアーティザンとが結び付けられるのである。ここでも、リスペクタビリティが社会・文化的局面において、労働組合員であ

るアーティザンを他のアーティザンから分離せしめる要因となりうる理由が積極的に明示されてはいないのである。むしろ、この章を一読して得られる印象は、著者が主張する労働貴族、すなわち労働組合に組織されたアーティザンという枠を越えて、その他のアーティザンもまた友愛協会、協同組合等の諸活動を通じて程度の差はあれ、リスペクタビリティを共有していたということではなからうか。また、アーティザンの特定グループと労働組合員であるアーティザンとが一致すると見る根拠も乏しいように思われる。

四章では、トマス・ライトの著作の分析を通じて、二章、三章での主張の裏付けが試みられる。ここで著者は、ライトの意識的な階層区分に見られる相互矛盾とその主観性を指摘し、ライトの著作全体から、彼が、言わば暗黙の前提として重視している労働者階級間の区分を読みとるべきことを主張する。これは著者の卓見である。そして、この重要な区分がアーティザンと不熟練労働者のそれであったことは、ライトが熟練機械工としての自らの経験をふまえて、機械工業の職場における慣習等の叙述をする際、遺憾なく示されている。しかし、著者のいうように、ライトの著作の分析から「それ以上の階層形成を読みとる」ことが果たして可能なのだろうか。著者の分析で示されるのは、アーティザンの一部からなる労働組合員が経済的に比較的恵まれたこと、熟練職業への独特の観念と不熟練労働者に対する排他性を他のアーティザン以上に示す存在であったということのみである。リスペクタビリティに関しても、この通念が労働組合員と他のアーティザンを分かつ契機となりえたといえるのであろうか。ここでその根

拠として述べられている事実は、ライトがリスペクタビリティの根幹である「自主独立」を保障する制度として労働組合を特に重視していたということにすぎない。たしかに、この理念を「典型的」に体现していたのは労働組合員であったかもしれない。しかし、このことが、リスペクタビリティに基づいて「労働組合員が他のアーティザンよりも優越した存在として一つの階層を形成していた」とする充分な根拠と言えるのだろうか。

このように、本書を通読して得られる印象は、十九世紀中葉以降のイギリス労働者階級内での重要な階層区分が、労働貴族とその他というよりもむしろ、アーティザンと不熟練労働者の区分にあったのではないか、というものである。とするならば労働貴族という階層区分を提示する意義はどこにあるのだろうか。著者は一章の末尾で、十九世紀労働貴族研究への批判学説を検討した後、労働貴族研究が十九世紀後半の労働運動の展開を理解する上で「意義を次のように述べている。『……十九世紀労働貴族研究が強調する、労働貴族形成における労働組合の役割の重要性と、一八八九年までは、だいたいにおいて労働貴族と労働組合員は同一であるとする把握をふまえると、少なくとも新組合主義の台頭までの改良主義の展開においては、労働貴族の存在は、たとえそれでもってすべてが説明されないとしても、重要な意味をもつであろう』と。とするならば、十九世紀後半の労働運動史上あるいは改良主義の展開と労働貴族のかかわりについての、新学説をふまえての著者なりの見解を期待した読者にとって、やや古い学説に依拠して、いくぶん斬新さに乏しい観のある終章に不満を感じざるをえない。生産の場における熟練のもつ意味の職種ごとの多様

性、生産の場の外での労働者の生活スタイル、文化面への理解の深化という近年の労働貴族研究の成果を二章、三章で見事に展開してみせ、またそれをトマス・ライトの分析から確認、深化させた後であるだけにこの感は強い。これらの成果から、この階層の政治上の意義に関する従来の見解に、いかなるインパクトがもたらされることになるのだろうか。換言すれば、「社会史」への

接近をみせている近年の労働貴族研究と旧来の政治史Ⅱ労働（組合）運動史の接合という困難な課題が依然として残るのである。以上、思いつくままに疑問点を並べてみた。評者の誤読・誤解については、著者のご寛容を乞うのみである。

（A五版 二四一頁 一九八八年 十二月 ミネルヴァ書房 三八〇〇円）

（京都大学大学院生